広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXIV　2012. 3. 22

アメリカの音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music* (2008) における聴取活動

―Texture/Harmony を主な学習要素とするレッスンに着目して―

粟　木　陽　子
（本講座大学院博士課程前期在学）

Listening Activities in "*Silver Burdett Making Music*" (2008) :
Paid to Lessons which Use Texture/Harmony as the Main Study Element

Yoko AWAKI

Abstract

The purpose of this study is to examine the listening ability and the characteristic of the way that training found in American music textbook *Silver Burdett Making Music* (2008) by Pearson Scott Foresman. Especially in this study, the lessons are analyzed set Texture/Harmony as the main study element. Its analysis was carried out focusing on the following two points: (1) specific learning contents and (2) the relevance with the National Standards for Arts Education. The total number of lessons set up Texture/Harmony has been set as the main study element was 31 across 9 grades. In addition, the rapid increase of lessons about Texture/Harmony can look after Grade-6. There were many activities to make compositions in order to compare or evaluate music and to represent by actions or remarks. It is confirmed that the characteristic of listening activities in *Making Music* series is the process of deepening their learning by moving the target to focus on with each passing grade while linking the performance and listening activities.

Ⅰ　研究の目的と位置づけ

現在アメリカの音楽科教育で使用されている代表的な教科書の１つとして，*Silver Burdett Making Music* シリーズが挙げられる。このシリーズは 2002 年に Pearson Scott Foresman 社から出版され，現在では 2008 年改訂版が, Pre-K, Grade-K および Grades 1-8 の計 10 学年分シリーズとして出版されている。Pearson Scott Foresman 社は，全米芸術教育標準 National Standards for Arts Education（以下，『標準』）に準拠した教科書を出版していること，指導内容の系統性が顕著であることなどが，特徴として挙げられる。

しかし，近年アメリカでは日本と同様に音楽の授業数が削減される傾向にあり，膨大な数のレッスンが設けられている *Making Music* シリーズを，すべて学習することはできないといえる。つまり，実際の授業で取り扱うレッスンは，教師の判断に任されているといえるのである。このような現状の中で，教科書を編集する側は，何を意図して教科書を編集しているのだろうか。

これまでに行われてきた *Making Music* に関する研究としては，日本とアメリカの教師用指導書の比較を通して，カリキュラムの内容や授業方法の比較研究を行った宮下・宇野（2009）[1] や，Grade-K から Grade-6 までの指導内容の系統性について研究した矢野（2010）[2]，２社が出版する音楽科教科書の比較研究を多文化教育の視点から行った Mason（2010）[3] らによるものが挙げられる。また，筆者はこれまでに，*Making Music*（2008）の Grade-1 から Grade-8 までの指導書の分析を通して，アメリカの音楽科教科書における器楽に関する研究を行った。分析の結果，*Making Music*（2008）における楽器の位置づけは，

全体的に見ると手段として役割の方が大きいが，学年ごとに変化を概観すると，高学年になるにつれて目的としての役割が大きくなっていき，最終的に手段と目的の両方の役割を均等に持つようになるということが分かった[4)]。

そこで本研究では，新たに聴取活動に着目し，*Making Music*（2008）において求められている聴取力の育成方法について明らかにすることを目的とする。何を意図して聴取活動が取り入れているのか，特に教科書の編集者側の視点から明らかにしていく。その中でも本稿では，指導書に示されているさまざまな学習要素 Element のうち，テクスチュアおよび和声 Texture/Harmony を主な学習要素として設定しているレッスンに着目する。聴取活動を通して，*Making Music* シリーズでの，テクスチュアおよび和声に関する学習の進め方や『標準』との関連性について明らかにすることを本稿の目的とする。

Ⅱ　教科書の構成

Making Music（2008）は，12 のユニットまたは 9 つのモジュールという大枠の中に，複数のレッスン（単元）が設定されている（図 1）。

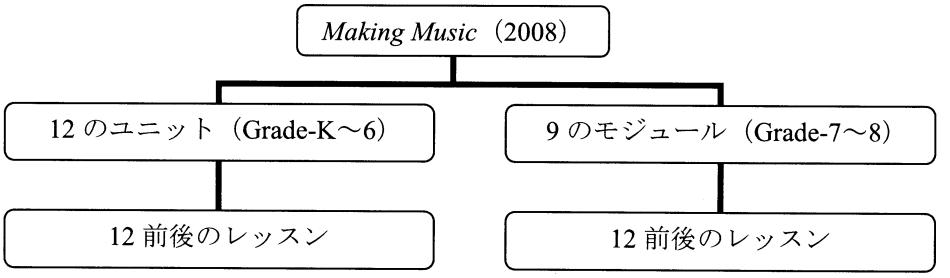

図 1　*Making Music*（2008）の構成

各レッスンには，演奏 Playing や歌唱 Singing など，身につけるべき技術 Skill が設定されており，これは，中心となるもの 1 つのほかにも，二次的なもの，補強程度のものなどから構成されている。また，それと併せて，リズム Rhythm や旋律 Melody などといった，学習内容とするべき音楽の諸要素 Element が設定されている（図 2）。

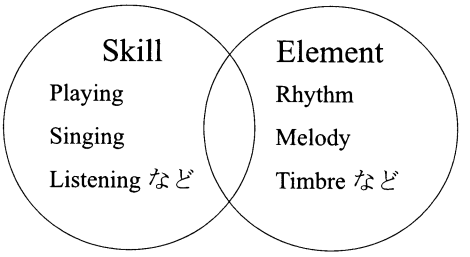

図 2　*Making Music*（2008）における Skill と Element の関係

また，各レッスンには，『標準』の中でも特に関連する項目についていくつか示されている。『標準』は Grades K-4，Grades 5-8，Grades 9-12 の 3 段階に分かれており，それぞれの段階は，9 つの内容標準と，それを複数の項目として具体化した達成標準とで構成されている。内容標準はすべての段階に共通したものが設定されており，特に「聴取」に関連するものとしては，第 6 項目＜聴取・分析・描写＞と第 7 項目＜評価＞が挙げられる。以下に，第 6 項目と第 7 項目の達成標準および段階の発展性について示す。

表１『標準』における聴取に関する項目と段階の発展性

Grades K-4	Grades 5-8
(6a) 提示された音源を聴いて，単純な音楽形式を識別する。	→[5]
(6b) 多様な文化を代表する様々な様式の音楽の例を，動作・発問に対する答え・説明をすることによって知覚能力を実証する。	(6a) 与えられた音楽の例における特定の音楽的変化の特徴を，適切な専門用語を用いて述べる。
―[6]	(6b) 多様なジャンルや文化を代表する音楽の例における，(音楽的) 要素の使用を分析する。
(6c) 音楽・楽譜・楽器・声・演奏について説明するときに適切な専門用語を用いる。	(6c) 曲の分析において，拍子・リズム・調性・音幅・和音・和声進行の基本原則の知識を示す。
(6d) 子どもや，成人の男女の声だけでなく，多くのオーケストラやバンドの楽器を含む多様な文化からの楽器の音色を識別する。	→[5]
(6e) 音楽を聴きながら，選択された重要な音楽の特徴や特定の音楽的変化を，動き（揺れる・スキップする・芝居のような動きなど）を通して表現する。	
(7a) 演奏や作曲を評価するための基準を考案する。	(7a) 曲の演奏や作曲の質や有効性を評価するための基準を開発し，各自の聴取および演奏の評価に用いる。
(7b) それぞれの特定の音楽作品および様式の表現を，適切な音楽の専門用語を用いて説明する。	
―[6]	(7b) 音楽様式の特定の適切な基準を用いたり，改善に役立つ意見の提案をしたりすることによって，自身や他人の演奏や作曲，即興の質や有効性を評価する。

(*National Standards for Arts Education* Outlines of Sequential Learning より筆者訳出)

Ⅲ　分析方法

今回の研究では，まず，Grade-K から Grade-8 までの教師用指導書を参考に，身につけるべき技術 Skill として聴取 Listening およびそれに関連するものが設定されているレッスンを抜き出す。そしてそれらを，学習する要素 Element ごとに分類し，指導する具体的な内容や評価方法について分析していく。その中でも本稿では，学習する要素にテクスチュアおよび和声 Texture/Harmony が設定されているものについて分析・考察を行う。そこで，今回の分析では (1) 具体的な学習内容，(2)『標準』との関連，の 2 点に着目する。

主な学習要素にテクスチュアおよび和声が設定されているレッスンの中で，具体的に学習している内容を検討した結果，次のように分類することができた。

＜テクスチュアおよび和声を学習するレッスンでの具体的な学習内容＞

1. 伴奏の有無
2. 複数のパートの重なり
3. パートナーソング
4. モノフォニー
5. ポリフォニー
6. ホモフォニー
7. 曲のジャンル
8. コードおよび音程関係
9. オスティナート
10. ドローン

そこで，(1) については，それぞれのレッスンごとに上記の 10 項目に分類し，学年ごとに数を比較する。1 つのレッスンに複数の学習内容が見受けられた場合，すべての内容を分類の対象とする。

(2) についてはまず，今回分析する各レッスンに示されている『標準』の項目から，聴取に関係するものを抜き出す。次に，抜き出した『標準』の項目の個数を学年ごとに算出する。そして，Grades K-4 と Grades 5-8 との項目の発展性を考慮しながら，聴取活動がどのように評価されていくのか，編集者側は，児童生徒がどのような力を身につけることを求めているのかを明らかにしていく。

Ⅳ　分析と考察

(1) 具体的な学習内容

主に聴取活動を行い，かつ主な学習要素としてテクスチュアおよび和声が設定されているレッスンにお

ける具体的な学習内容を，学年別にまとめたものが表２である。

表２　具体的な学習内容の学年別内訳

具体的な学習内容＼Grade	K	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
伴奏の有無	1			1						2
複数のパートの重なり		1	1					2		4
パートナーソング						1	2			3
モノフォニー								1		1
ポリフォニー							1		2	3
モノフォニー							1	1	2	4
曲のジャンル							1	3	3	7
コードおよび音程関係								2	2	4
オスティナート			1						1	2
ドローン									1	1
合計	1	1	2	1	0	1	5	9	11	31

▒は，各学習内容において，最も多く学習機会（レッスン）が設定されている学年

表２から，テクスチュアおよび和声に関する学習内容は，Grade-6 から Grade-8 にかけて大幅に増加することが読み取れた。Grade-5 までは，Grade-4 を除くすべての学年で１つあるいは２つの学習が設けられていることから，少ないながらも継続して学習が行われようとしていることがわかった。

Grade-K から Grade-3 では，テクスチュアの厚薄に焦点を当てて学習していく。伴奏がある場合と無い場合とで曲調や印象を比較したり，アンサンブルでの楽器が増えるにしたがってテクスチュアがどう変化するか聴き取ったりする活動が見られた。特に Grade-2 までは，最初に聴取する対象を歌声としており，その後，楽器でのオスティナートや伴奏が加わったときのテクスチュアの変化について考えさせる場面が多かった。その際，楽器の音の高低などには触れず，単に「重なっているか」「音の厚みが変化しているか」を聴き取ることを重視していることがうかがえる。また，Grade-3 で初めて歌詞のない楽器のみの楽曲が取り上げられている。これらのことから，まずは歌唱と結びつけながらテクスチュアについて学習し，次第に聴取する対象を広げていくと考えられる。

Grade-5 および Grade-6 では，２つの異なる旋律が重なる楽曲（パートナーソング）を用いた学習が集中的に行われている。ここでもまずは歌唱曲から取り上げている。旋律の重なり方を聴取してから実際の歌唱につなげることで，２つの旋律によるハーモニーをより深く理解できるように学習が進められていく。その後，聴取する対象をオーケストラなどの楽器に移し，２つの旋律が重なったときの独特のハーモニーについて聴き取っていく。

そして，その学習を応用する形で，モノフォニーやポリフォニー・ホモフォニーに関する学習へと移行していく。パートナーソングを学習した次のレッスンでは，１つの楽曲の中に存在するホモフォニーとポリフォニーとの各部分とを聴き分ける活動を行っている。さらに，Grade-7 以降では音楽史についてのモジュールが設けられており，そこでマドリガルや聖歌といった中世およびバロック期の音楽を聴取することで，それぞれのテクスチュアの違いを理解していく様子がうかがえる。その際，１つのテクスチュアに焦点を絞るのではなく，必ず２つ以上の異なるテクスチュアを取り上げているのが特徴的である。

また，Grade-6 以降では，ブルースやジャズなど自国の音楽を取り上げるレッスンが大幅に増加している。それぞれのジャンルにおいて頻出するコードやその進行方法に着目すると同時に，時代とともにそれらが変化してきた過程について学習する。アメリカで誕生した音楽がどのように発展してきたかを知るとともに，ぞれぞれの特徴についてより深く知覚できるようになると考えられる。

一方，アフリカのハイライフや南米のサンバなど，アメリカ以外の国の文化について学習する機会も存在していたが，自国に関連する音楽を取り上げるレッスンと比較すると，設定されている学習機会は少ないといえる。異なる国や地域を取り上げる場合は，ドローンやオスティナートなど，単純な反復音・持続音に着目することが多くあった。ドローンやオスティナートは，歌唱の伴奏やアンサンブルを多く行う低学年や中学年で多く用いられていたが，聴取活動においては高学年でも扱うということがわかった。その

場合，いずれも文化や歴史と関連させながら，音楽の原始的・民族的な音楽構成の特徴について学習していく様子が見受けられた。また，これらの学習では，諸外国の伝統楽器および民族楽器や特定の音型にも着目することから，リズム Rhythm や音色 Timbre といった他の学習要素との関連性が強いと推測される。また，コードに注目することは少ないことから，諸外国の音楽を聴取する場合は，和声よりもテクスチュアに重点を置いていると考えられる。なお，輪唱やカノンなどについては聴取活動では取り扱わず，実際の歌唱・演奏活動を通しての学習を優先させると考えられる。このように，特定のジャンルに着目することで，多様な音楽のテクスチュアや和声の特徴を知覚することとなり，児童生徒の聴取力を高められると考えられる。

(2)『標準』との関連

今回の分析対象としているレッスンに設定されている『標準』の第 6 項目および第 7 項目の個数を学年別に分類すると，表 3 のようになった。

表 3　聴取に関連するレッスンと関連する『標準』の学年別内訳

Grade / 『標準』	K	1	2	3	4
6a	0	0	0	0	0
6b	1	0	1	1	0
6c	0	0	0	1	0
6d	0	0	0	0	0
6e	0	1	0	0	0
7a	0	0	0	0	0
7b	0	0	0	0	0

Grade / 『標準』	5	6	7	8
6a	1	2	0	2
6b	1	3	3	3
6c	0	0	2	1
7a	0	0	2	1
7b	1	0	0	1

は，各学年で最頻出している項目

表 3 から，Grade-K から Grade-4 にかけては，多様な文化における音楽の例を，動作や言葉で表現することが主に求められていたが，Grade-5 から Grade-8 にかけては，楽曲の音楽的要素に着目して分析すること，次いで，音楽的変化の特徴を，適切な専門用語を用いて述べることが求められているということが読み取れた。また，楽曲や他人の演奏を評価する活動は，第 2 段階以降でないと行われないということがわかった。

第 1 段階では，目を閉じて楽曲を聴き，伴奏があるかどうかを答えさせたり，新しい楽器が加わるたびに指を 1 本ずつ立てさせたりといった活動の例が見られた。ただ言葉で答えるだけでなく，動作を用いることで，生徒が表現しやすいとともに，教師が児童の理解度を容易に判断することができるといえる。

第 2 段階で，テクスチュアが途中で変化する楽曲を取り上げたり，文化や歴史の変化と関連させながらテクスチュアの違いを聴き取らせたりする活動が見られたが，それらは（6a）の「音楽的変化の特徴」について述べるための活動であるととらえることができる。また，Grade-8 においてドローンやオスティナートに着目していたのは，（6b）にある楽曲の「音楽的要素の分析」を目的とした活動を行うためだったと考えられる。また，1 つの楽曲の中での変化に着目する場合も，1 つのジャンルの中での変化に着目する場合もみられたことから，さまざまな角度から楽曲の特徴を理解させようという編集者側の意図がうかがえる。

また，第 2 段階では，それぞれのテクスチュアおよび和声の特徴や，共通点・相違点について自分の言葉でまとめさせる活動が多くなった。後者の場合は，発表させるよりも記述させることのほうが多く，あとから児童生徒が自分で振り返ることが出来るように工夫していると考えられる。特にテクスチュアや和声の場合，それぞれの用語と特徴を結びつけることが難しいと予想されるため，前述したように生徒自らが記述し，まとめていくことが大切な学習過程といえるのではないだろうか。

Ⅴ　テクスチュアおよび和声における聴取活動の特徴

聴取活動を通してテクスチュアおよび和声について学習しているレッスンを，(1) 具体的な学習内容，(2)『標準』との関連，の2点に着目して分析した結果，*Making Music* における聴取活動の特徴を以下のようにまとめることができた。

第1に，各テクスチュアの特徴および和声について学習する場合は，文章化して比較・評価する活動が多く，テクスチュアの違いや変化について学習する場合は，動作や発言によって表現する活動が多いということがいえる。児童生徒の発達段階やテクスチュアごとの特性を考慮した結果，考察してきたような学習順序や評価規準となったと考えることができる。

第2に，低学年において演奏活動を通して学習した内容を，高学年で再度聴取活動において取り上げることで，それぞれの音楽様式に関する知識を深めていくということがいえる。低学年での演奏活動にオスティナートが用いられる理由は，簡単に演奏できて練習に手間がかからないため，オスティナートの仕組み自体を認識するためなどが考えられる。それらをふまえたうえで，高学年で再度オスティナートに着目し，楽曲の中での役割や音楽の発展との関わり方を学習することで，テクスチュアのあり方をさらに深く理解できるといえる。

今後は，他の音楽的要素にも着目して具体的な学習内容や『標準』との関連を分析し，要素や学年に見られる学習内容の特徴や，要素ごとに関連する『標準』の項目にどのような違いが見られるか，明らかにしていきたい。

Ⅵ　注および参考文献

1)　宮下俊也，宇野加奈子「シルバー・バーデット『Making Music』カリフォルニア版の教師用指導書において≪かえるのがっしょう≫はどのように扱われているか」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第18巻，2009，pp.131-139。

2)　矢野沙織「アメリカの音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music*（2008）における指導内容に関する研究」広島大学大学院教育学研究科修士論文，2010。

3)　Mason, Emily, Multicultural Music Represented in Current Elementary Music Textbooks: A Comparative Study of Two Published Music Series, *Applications of Research in Music Education* 28 (2), 2010, pp29-41.

4)　拙稿『アメリカの音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music*（2008）における器楽に関する研究』広島大学教育学部第四類音楽文化系コース卒業論文，2011。

5)　特に項目が設けられているわけではないが，前段階をより高度化させた状態になることが期待されている。

6)　次の段階につながるような聴取活動が行われるとは想定されるが，次の段階で現れる『標準』では，この段階での発達上適切ではない可能性があり，直接関係するような項目が設けられているわけではない。

* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-K Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-1 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-2 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-3 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-4 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-5 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-6 Teacher's Edition, Pearson

Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-7 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Beethoven, Jane. et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition,* Grade-8 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
* Frances, S. Ponick. et al., *National Standards for Arts Education,* Rowman & Littlefield Education, 1994.
* 早川倫子「米国の小学校音楽カリキュラムについての事例研究（1）ーコネチカット州イーストライム公立学校を中心にー」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 141 号，2009，pp.85-89。
* 本間政雄，高橋誠編『諸外国の教育改革ー世界の教育潮流を読む　主要 6 か国の最近動向ー』ぎょうせい，2000。
* 小島律子「音楽教育のスパイラル・カリキュラムにおける連続性と発展性ーアメリカの音楽教科書指導書の分析を通してー」『大阪教育大学研究紀要　第Ⅴ部門』第 30 巻 3 号，1982，pp.133-146。
* Mason, Emily, Multicultural Music Represented in Current Elementary Music Textbooks: A Comparative Study of Two Published Music Series, *Applications of Research in Music Education* 28 (2), 2010, pp29-41.
* 三村真弓「言語力の育成を目指したこれからの教科教育ー音楽科授業における言語力とは何かー」『日本教科教育学会誌』第 31 巻，第 4 号，2009，pp.43-46。
* 宮下俊也，宇野加奈子「シルバー・バーデット『Making Music』カリフォルニア版の教師用指導書において≪かえるのがっしょう≫はどのように扱われているか」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第 18 巻，2009，pp.131-139。
* 文部科学省『諸外国の教育の動き 2004』国立印刷局，2005。
* 文部科学省『諸外国の初等中等教育』財務省印刷局，2002。
* 佐地多美「鑑賞に関する一考察ーアメリカ・東ドイツ・日本における鑑賞教材を比較してー」『名古屋女子大学紀要』第 21 号，1975，pp.129-138。
* 曹念慈「教科書『*Silver Burdett Making Music*』の低学年の内容からみる諸芸術教科を統合する方法」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XVII，2005，pp.11-19。
* 筒石賢昭「音楽科教育におけるカリキュラム開発の研究（5）ーアメリカの鑑賞教育の内容と編成についてー」『佐賀大学教育研究論』第 36 集，第 2 号，1988，pp.79-98。
* 矢野沙織「アメリカの音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music*（2008）における指導内容に関する研究」広島大学大学院教育学研究科修士論文，2010。

参考 web 資料

* The Kennedy Center　ARTS EDGE　http://artsedge.kennedy-center.org/educators.aspx
* NAfME　The National Association for Music Education　http://www.menc.org/
* Pearson Education, Inc.　http://www.pearsonschool.com/